

意見陳述書

2009年4月13日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市渝中区枇杷山正街72号附2号1单元

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 蔣 万錫

1. はじめに

私は蔣万錫と申します。1931年11月1日生まれで現在77歳です。

日本軍の爆撃で、私の8歳上の兄とその妻が1941年6月5日に空襲を避けるために避難した隧道の中で押しつぶされて死亡しました。また母が経営していた自宅と家具店を兼ねた家も1939年から41年まで3年連続して日本軍の爆撃で破壊されました。

新中国になった後、私は、考古学を学び、1957年から重慶市博物館で30年余り働き、退職後の2003年頃から重慶大爆撃被害者の自主的な運動である対日民間賠償請求に関わるようになりました。

2. 爆撃以前の私の家族

最初に重慶爆撃が始まる前の私の家族についてお話しします。

私の父蔣国均は1890年頃生まれました。祖父は、清朝末期の四川省の地方官吏で、現在の重慶市巴南区の土橋郷に住んでいました。その祖父が、1905年頃に病死したため、それを機に当時15歳だった父は、家を出て重慶市内で家具店に勤めるようになりました。

父は、何箇所かの家具店で一所懸命に働きましたが、生活が不安定だったために結婚する機会に恵まれませんでした。ようやく1922年、父は32歳のとき私の母呉文清と結婚しました。

結婚した翌年の1923年、私の兄蔣万鈴が生まれました。父は、家族の生活を安定させるために、家具店を開こうと計画し、父の師匠や親友、さらに母の実家にも借金を申し込み、数年がかりで資金を集め、ようやく1929年に家具店を開きました。店を開いた場所は、重慶市の中心部に位置した較場口地区の

草葉街23号でした。草葉街は、店舗の半数以上が家具店という場所でした。父は二階建ての建物を借り、一階を店舗用に改装し、2階を住居として使いました。

父は、皆の協力で店が末永く繁盛することを祈って、「協昌恒家具店」という名前を店につけました。店では主にテーブルやベッド・筆筒などを販売していました。

1931年に私が生まれましたので、私の家族は、父蔣国鈞、母呉文清、兄蔣万鈴と私の4人となりました。

1936年、私が5歳のとき、父が肺結核で亡くなりました。その後は母が、家具店の経営を引き継ぎ、兄と私を育ててくれました。

しかし母一人で家具店の経営を維持するのは大変で、生活は以前より苦しくなりました。それで兄は店の仕事を手伝わなければならなくなり、小学校を中退しました。兄は、毎日店に出て母の仕事を手伝うようになりました。こうして店をкаろうじて維持することができました。

1939年、兄は16歳のときに、同い年の王素華と結婚し、母と共同で店の経営にあたるようになり、一家の生活を支えてくれました。

1937年の7.7事変後、日本軍は全面的に中国を侵略し始めました。そこで日本軍の占領地域の政府機関や工場企業、病院、学校および市民が、相次いで重慶に移ってきました。このため重慶の家具業は、供給が需要に応じきれないほど繁盛しました。そのおかげで、私たちの生活はだんだん良くなってきました。

1938年、母は草葉街の借家を買取り、重慶郊外の巴県王家溝に50畝の土地を購入し人に貸して賃料を得るようになりました。

3、重慶爆撃で受けた私の家族の被害

日本軍の重慶爆撃は1938年から始まりましたが、母は、爆撃で息子を二人とも死なせないために、弟の私を田舎に疎開させることにしました。1939年2月、私は小学校の新学期が始まる前に、重慶市内から約13キロ離れた、現在の重慶市巴南区の土橋郷尹家坪の叔父（母の弟）呉文徳の家に疎開しました。

こうして私は普通は巴南区土橋郷の叔父の家に住み、その小学校に通い、ときどき重慶市内の草葉街の自分の家に帰るような生活を始めました。

私の家の家具店の仕事は、日本軍が1939年5月の3日、4日の連続爆撃を行うなど、重慶爆撃が本格化して以降も、母と兄夫婦が草葉街に住んで続けられていました。私の家族が受けた最初の爆撃被害は、1939年7月5日の爆撃でした。この日の爆撃で草葉街からも被害が出ましたが、私の家も爆撃で家の壁や屋根が破壊されました。

翌年の1940年8月19日には、日本軍が投下した焼夷弾で、草葉街の私の家は

全焼し、商品の家具などの大事な財産もすべて焼失してしまいました。

家が全焼した直後に、母と兄は、家を建て直すことを決意しました。苦勞して何人もの知り合いから借金して、以前と同じ草葉街23号に店舗兼住宅の2階建ての家を建て、再び家具店の営業を始めました。

1941年の6月5日には、後に詳しく述べるように、私の兄夫婦が避難した較場口の大隧道の中で踏みつぶされて死亡しました。またその直後の6月14日には再建したばかりの家が三度爆撃で破壊されました。

このように私の家族は、1939年から41年の3年間に日本軍の爆撃で三度家を破壊され、それだけでなく41年6月には家族まで殺されたのです。

4. 1941年6月5日の爆撃で発生した6・5大隧道惨案

1941年6月5日の「6・5大隧道惨案」は、日本軍が6月5日に行った爆撃のため、多数の重慶市民が較場口大隧道に避難し、その防空洞の中で窒息したり、押しつぶされて多数の死傷者を出した大事件です。当時、重慶に記者をおく各国のマスコミが報道し、世界中に報じられた爆撃被害です。私の兄と妊娠8ヶ月の兄嫁もこの較場口大隧道の中で押しつぶされて死亡しました。

6月5日の爆撃の翌日、私は叔父の家で近所の人から、爆撃で避難した草葉街の人たちなど多数が防空洞の中で死んだ、私の兄と兄嫁も死んだらしいということを知りました。私はびっくりして叔母（母方の叔父の嫁）に連れられ、急いで草葉街の家に向かいました。

自宅の庭に入った途端に、私の目には地面に横たわっている兄と兄嫁の遺体が目に入りました。近づいて見ると、兄夫婦は二人とも顔色は蒼白で、服は泥だらけになっていました。

兄の方は頭に踏まれた跡があり、髪の毛がほとんどなくなっており、鼻孔には血痕が残っていました。兄嫁の方は、両足に踏まれた跡があって腫れ上がり、体中に血が付いていました。

母は遺体のそばで泣きながら「一家の柱の息子と嫁が死んだ。これから私たち親子はどうやって生きていくのよ」と叫んでいました。母が激しく泣いてうずくまっているのを見た近所の人でも泣いていました。私も、母のそばでずっと泣きっぱなしでした。

私は、しばらく経ってから、母から6月5日の爆撃の様子などについて聞きました。母によると、6月5日、人々は通常どおり仕事したり、学校に通ったりしていました。しかし、その日の午後6時過ぎに空襲警報が鳴って日本軍の飛行機が近づいてきたため、人々は四方八方から避難先の防空洞に入り込みました。私の店があった草葉街の人々は、一番近い較場口大隧道という防空洞に入りました。兄と兄嫁も大勢の避難者についてその防空洞に避難しました。母は

中国の古い慣習の纏足をしているため空襲があっても避難しませんでした、この日も空襲の間中ずっと店にいたようです。

母は、空襲が終わっても兄夫婦が戻ってこないし、間もなく較場口の大隧道で大量の死者が出た話しが伝わってきたので、居ても立ってもいられない気持ちだったと言います。翌朝、母は5人の使用人と一緒に較場口大隧道の3つの出入り口付近を見て歩きました。大隧道からは膨大な数の死体が運び出されている状況だったようですが、母たちは、演武庁にある防空洞の出口付近で、死体の山の中から兄と兄嫁を見つけ出し、自宅まで運んだそうです。

その後、私は、6・5大隧道惨案の生存者からも兄夫婦の最後の状況を聞く機会がありました。同じ草葉街に住んでいた隣人の湯金臣さんも、6・5大隧道惨案の幸存者で、隧道内の状況について、「6月5日には、較場口の隧道に避難した人の数が非常に多かった。時間が経つにつれて防空洞の中は大変暑くなり、換気が悪くとても息苦しくなってきた。このため多くの人々が息苦しさに耐えられなくなって防空洞の方向に押し合いながら逃げ出そうとした。それで防空洞内は一変に極度に混乱した状態に陥った。子供の泣き声、『助けてくれ！』『痛い！』という悲鳴があちらこちらから聞こえ、絶えない状況だった。草葉街の住民も約四十人が6・5較場口大隧道惨案で窒息死や圧死したりした。呉文清さんの長男と嫁さんも隧道内で人に押しつぶされて圧死した。嫁さんは妊娠していたので本当にかわいそうでした。」と語ってくれました。

また日本の重慶大爆撃の有名な研究者である前田哲男先生も、1980年代に重慶を訪問して、草葉街に住んでいる6・5大隧道惨案の幸存者から聞き取りをしています。そのインタビューの結果は前田先生の有名な著書の中に紹介されています。

5. 兄夫婦の死亡後の私の家族

兄夫婦が亡くなった数日後、母は兄夫婦の遺体をかのおけに入れ、親戚に手伝ってもらって、以前に母が購入していた巴県王家溝の土地に運び、そこに埋葬しました。

母は、兄夫婦を6・5大隧道惨案で亡くし、その直後に家具店のために立て直したばかりの店舗が再び爆撃で被害を受けたことで、これから家具店の経営を続けることを諦めました。

こうして母は、家具店の経営を父の弟子だった文漢清という人に依頼することにしました。そして母は私と一緒に南岸区の叔父の家に同居することになりました。

2年近く経った1943年3月、母は土地を売って資金をこしらえ再び重慶市内にもどって店を再開しました。私も間もなく重慶にもどって母と一緒に生

活するようになりました。

その後、1949年に中華人民共和国が成立し、その直後に新中国の政府が小売店舗に対する規制措置を発動したため、母は1950年に家具店を閉めました。

私の進学と就職のことについて述べますと、重慶市渝中区の高校に通っているとき、中華人民共和国が成立しました。新中国の成立後、私は、一旦高校をやめて一時働きましたが、もう一度別の高校で学び直し、1952年に卒業しました。

その後、当時の西南師範学院で考古学を2年間勉強し、1954年10月から西安市の考古文物管理委員会で働き、そこに所属しながら1年間北京大学でも考古学を学びました。

私は、1957年から重慶市博物館に勤めるようになり、1991年の定年で同博物館を退職しました。1958年に結婚し、2人の娘を育ててきましたが、2人ともすでに嫁いでいます。

6. 重慶爆撃被害者の対日民間賠償請求の権利

母は、1994年に95歳で亡くなりました。私は1957年からずっと母と一緒に生活していましたから、母が死ぬまで兄夫婦が日本軍の爆撃によって非業の死をとげたことで深く心を傷つけられ、ずっと苦しんでいたことを知っています。母は、若い頃から急に涙ぐんだり、また会話の最中にぼんやりして話しかみ合わなくなることがよくありました。私は、母の仕草や表情から、母が胸の中で死んだ兄のことを思い出していることが判っていました。

私は、重慶博物館を退職して時間に余裕ができるようになってから、兄のことをよく思い出すようになりました。兄は、私より8歳年上で、とても弟思いで、私がせがむと喜んで一緒に遊んでくれました。私はいつも兄を頼って暮らしていました。兄は、私が叔父の家に疎開した後、何度も私を訪ねて来てくれました。兄が死んだ6・5隧道大惨案の当日、兄は休みで重慶の実家に戻っていた私を叔父の家までおくってくれ、自宅に戻ったばかりでした。

私は、2004年の早い時期、新聞に“重慶大爆撃被害者聯議会”の記事が載せているのを見て、すぐに聯議会に連絡を取りました。その後、「重慶大爆撃民間対日訴訟原告団」に入り、日本国を相手とする裁判を始めました。

重慶大爆撃という5年半に及ぶ、史上類例のない超長期の無差別爆撃が私たち重慶市民に残した傷は深く、日本軍が投下した爆弾で市民が傷つき流した血は、今も止まらずに流れ続けています。

重慶爆撃裁判を始めてから、爆撃の被害者たちと爆撃体験を口に出して話し

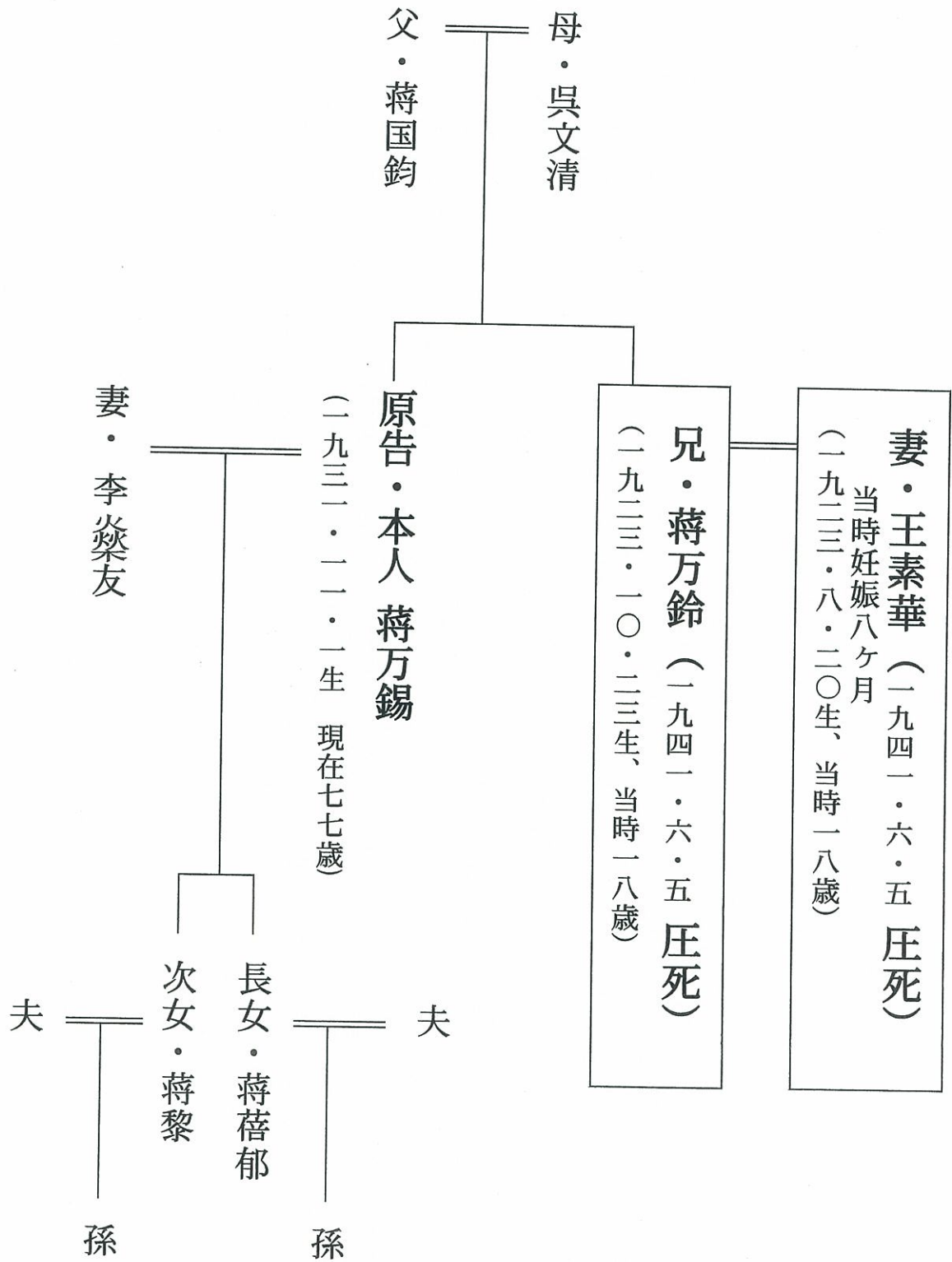
合うことによって、被害者たち全員が共通した思いであることを知りました。そして私は、自分の胸の中に、兄を失ったことで出来た空洞がずっと埋められないまま続いていたことに気が付きました。この重慶爆撃裁判は、日本軍の無差別爆撃によって奪われた人間の尊厳を取り戻すための裁判なのです。

従って、私は、「重慶大爆撃の被害者は、無差別爆撃の加害者である日本国に対して『謝罪と賠償』を求める法的な権利を持っていること。この権利は日中共同声明や日中平和友好条約によっても消すことはできない絶対不可侵の権利であること。」を訴えたいと思います。

最後に、日本の裁判官がこの私の訴えを認めるよう強く求めることを表明して私の意見陳述を終わります。

以上

原告蒋万錫家系図

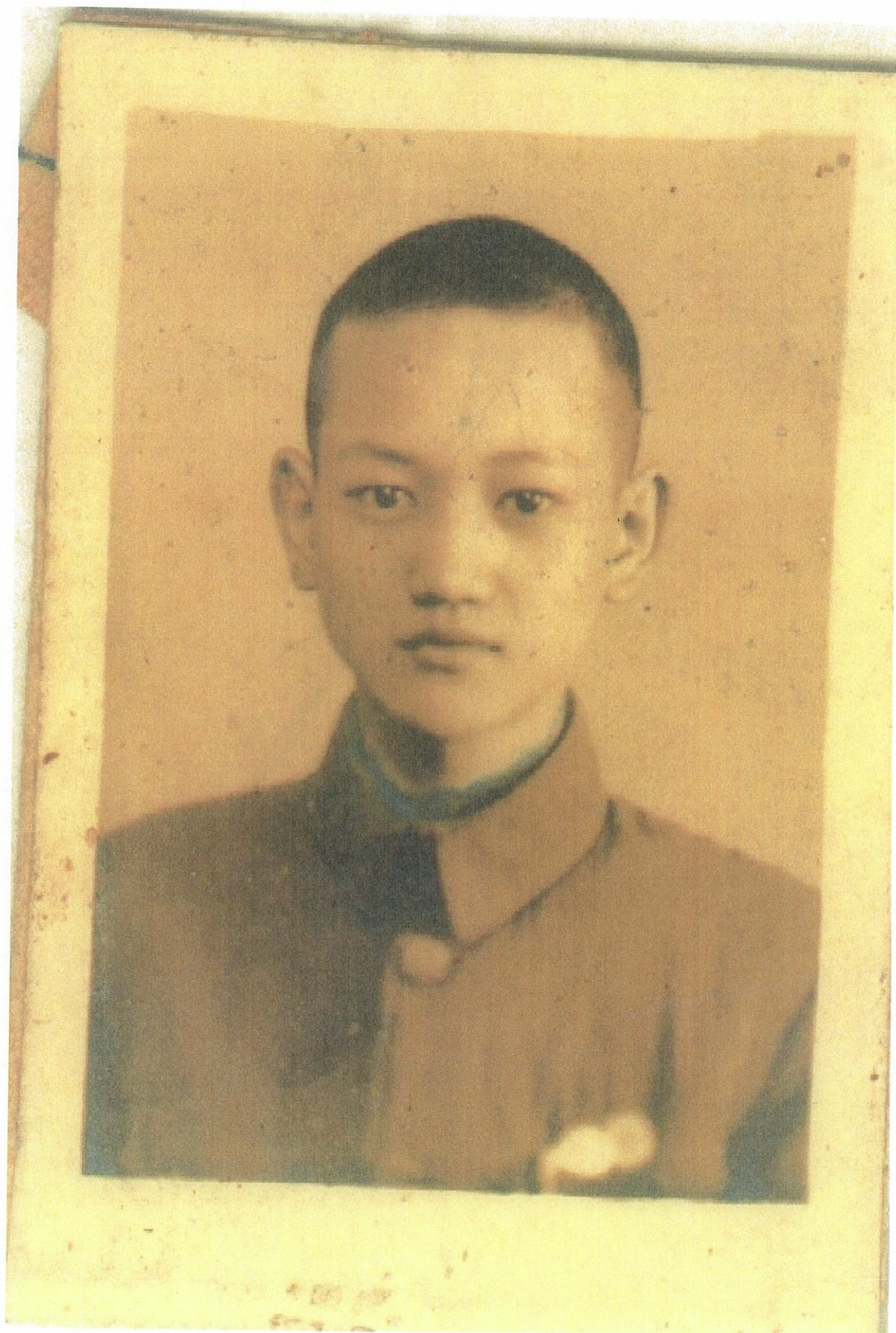


原告蔣万錫の兄蔣万鈴の遺影



1941年6月5日、蔣万鈴が18歳の時に重慶大隧道惨案で亡くなった。

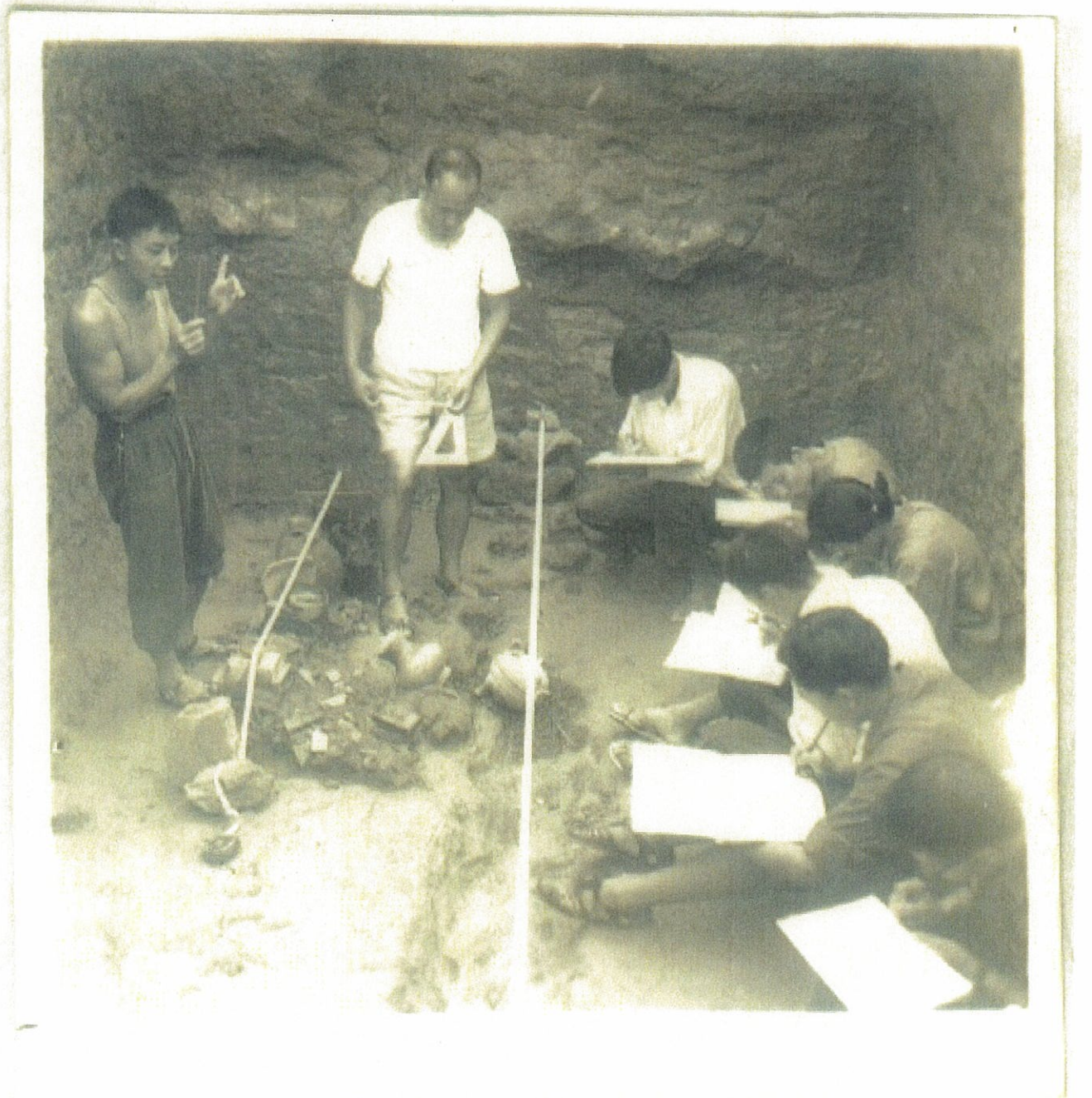
原告蔣万錫の兄・蔣万鈴の遺影



原告蔣万錫の母・呉文清(1983年)



考古学を学ぶ原告蔣万錫ら。湖北・宜昌
の遺跡発掘現場にて(1976年)



1976年 在湖北省宜昌市

重慶大爆撃隧道大惨案(1941年6月5日)の
犠牲者たちのようす



草薬街周辺と較場口大隧道入り口

